

# ART ESSAY

アート★エッセイ

## 絵が好きですか？



柴田 敏雄  
(写真家)

幼稚園の頃、中耳炎をわずらい長期間お休みしました。耳鼻科に通う道すがら、祖母に買ってもらった画用紙と水彩絵の具が楽しみでした。毎回1本ずつ増えていく絵の具で、一日1枚ずつ画用紙に無心に庭を写生し、自分だけの世界にはまり込んでいました。これが事の始まりかも知れません。小学校に上がったからも、図工は楽しみな時間でした。

長じて芸大の油画科に進みましたが、1969年の学園闘争のあおりで大学2年時に学校が閉鎖となり、また日本の画壇の事情などを知るにつれ、いわゆる洋画の世界への興味も薄らいでいきました。そして絵がうまくなることより本当の道は他にあると思うようになり、アメリカの現代美術への興味が募り、また版画やささまざまな技法、メディアを試みました。

やがて描くことに疑問を持ち、当時、台頭してきたアメリカン・ニュー・シネマの影響を受け、映像に興味をわいてきました。卒業し、東映に1年あまり在籍した後、もっと世界を見てみたいという気持ちが高まり留学先を探しました。

その後、ベルギーで4年余りを過ごしました。私の入学したアントワープ市の王立アカデミーには当時写真学科ができたばかりで、校長からの勧めもあり、写

真を始めてみました。

70年代の終わりごろ、パリで写真展を見たのがきっかけで写真の時代を感じ、写真を本格的にやっというと思い始めました。

人からよく、小さい頃から絵が好きでしたか？と聞かれます。実際、思春期のある一時期を除いて、特に小さいときはよく絵を描いていました。それなのに、理由はわかりませんが、いいえ、と答えているような気がします。16歳のときに渋谷の書店で見たセザンヌの画集に触発され、絵画の世界に目覚めてからは作家になることだけを考えていました。

現在は写真を自分のメディアとして、写真で作品を作っています。人生の大半をこんな風に過ごしているのに、絵に対して知らん顔したりするのは、なにかアートにまつわる胡散臭さとコンプレックスを感じているからなのかも知れません。

自分の中には、特殊な感じのする芸術家より、まずごく普通の現代人でありたいと思う気持ちがあります。時々、制作上の問題に直面しますが、“普通”であることがいつも自分をニュートラルな領域に引き戻し、リセットしてくれていると感じています。

(しばた としお)



Grand coulee Dam, Douglas County, WA 1996

## 特集

### 新学習指導要領の〔共通事項〕がわかる！

第 3 回

### 〔共通事項〕がわかる！ — Part3

## 〔共通事項〕は日常的事

キレイ、スキ、ステキ、カッコイイ…などは感じたことをもとにした判断である。こうした判断は感性的判断といわれる。しかしよく考えてみると人のすべての行動はこの感性的な判断に根拠を置いているのではないか。

「夕日がきれいだ」というのは、西に沈む太陽の地平線との角度によって赤く見える長波長が眼球内の錐状体細胞を…というようなことは「夕日がきれいだ」という心に起こった出来事の感性的判断の結果、考察され、説明されたことである。

心に届く感性的な感動が無ければその出来事そのものにまなざしを向けることはない。行動を突き動かすようなモチベーションによってすべての事は始まる。数学の処理や定理の発見も、最も美しい単純化されたフォルムに近づいて行こうとする盲目的な意思を感じる。

感性的な判断はすべての行動の根底にあって、人の行動を深いところで律していると考え、生きていくことの「質」にかかわることでもあるといえる。いわば新しい価値意識の形成を求めている。今日のように物質的な豊かさのみを追求してきた経済至上主義が疑問視される時代あっては、造形活動にかかわる感性的な判断能力の質に教育行為の先導的な役割が求められている。

「形や色などを基に、自分のイメージを持つこと」、「形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること」などが期待される資質・能力として明らかにされたが、これは造形教育が最も大切にしてきた部分であり、当然のことを当然のごとく示しただけである。

今期の改訂を貫く「生きる力」の重要な柱なのだ。

## 〔共通事項〕がわかる：視覚言語の活用とイメージの形成

山口大学教授 福田 隆眞

### 1. はじめに

平成20年の小学校図画工作科、中学校美術科の学習指導要領の改訂において、〔共通事項〕が新設された。これは表現と鑑賞の各活動において、共通に必要な資質や能力を示している。指導において、自分の感覚や活動を通して形や色などの造形要素、動きや奥行きなどの視覚言語の造形的な特徴を捉えて、自分のイメージの形成を促すことを示唆している。

美術教育の目的の一つには直接的に美術の表現や受容に関わる能力の育成がある。美術作品や造形作品を制作するための技能であり、先達の作品を受容、理解する能力である。さらに美術教育では美術文化を主とする文化の理解と創造の役割がある。そのためにもここに新設された〔共通事項〕の内容は美術教育の基礎的能力の育成を示している。

学校での美術教育はいろいろな目的をもっている。造形の素材に触れながら発想や構想を伸ばし、色や形を使って自己表現や目的表現をし、鑑賞することによって美術の世界を理解すると同時にイメージを広げる等々の様々な活動を通して、美術による人間形成と美術の教育を促している。いわば美術教育は美術文化の理解、継承と同時に美術文化の創造を目的としている。そのためにイメージの形成と視覚言語の理解、活用は主要な役割を果たすと考えられる。

本稿では以下に、〔共通事項〕とイメージの形成、美術教育の一つの方法としての視覚言語の活用について述べる。

### 2. 小学校図画工作科での〔共通事項〕

小学校図画工作科の学習指導要領では〔共通事項〕が次のように示されている。第1学年及び第2学年では、「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色などをとらえること。イ 形や色などを基

に、自分のイメージをもつこと。」としている。第3学年及び第4学年では「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、組合せなどの感じをとらえること。イ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。」となっている。さらに第5学年及び第6学年においては「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえること。イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。」としている。

第1学年から第6学年までを通じて、図画工作の表現媒体である造形要素の色や形と自分のイメージを結びつけるための方法として、視覚言語との関連を段階的に取り扱っているといえる。感覚を通して捉えるということは、視覚による色や形だけでなく、触覚や皮膚感覚による材質感や湿度のような空気の感覚や雰囲気までも捉えようとするのである。

日本語は豊かな擬音語、擬態語をもっている。「ザラザラ」「ツルツル」「ピカピカ」「ベタベタ」「しっとり」「むしむし」などのようにテクスチャーや周りの空気感覚までもイメージする言葉がたくさん存在している。これらは色や形で表現したり、鑑賞によって色や形を受容し理解したりしながら、イメージの形成に役立つものである。

自分の感覚で捉えることは全く自由気ままに表現したり受けとめたりすることのようにも思えるが、言葉を介して表現や受容を行う場合には、伝



達機能としてのある程度の共通のイメージが存在している。例えば、晴れた朝の爽やかな感じを色にととえると明るい緑色や青色を連想することが多い。それは晴れた日の空の青色や木々の緑を経験的に受け止めているからであろう。

藤岡喜愛によれば、「一つ一つの事物のイメージだけでなく、それらが組み合わさったもの、過去や未来に属するもの、さらには『世の中』とか、宇宙についてのイメージまで、ほとんどあらゆることについてのイメージが、私たちの心の中にはある。私がこれまで生活し経験したこと、知識として与えられたこと、そうしたことのすべてが歴史的に蓄積されている。」と述べ、色や形、材質感や空気のイメージもある程度心の中に蓄積されていると考えられる。



こうした自分の感覚や活動によって捉えた造形要素や視覚言語に基づいて、イメージの形成を図ることができる。造形要素を表現のために用いる方法が視覚言語、あるいは造形文法とも言われる。色や形の組合せという例示が第3学年及び第4学年では示されている。さらに第5学年及び第6学年では、動きや奥行きという例が示されている。

こうした考え方は、シンガポールのように情報技術を重視した教育を行っている美術教育においても見ることができる。シンガポールの教育課程においては、小学校までに美術の要素として、点、線、形、形態、色、テクスチャー、空間を例示し、デザインの原理として、バランス、対比、調和、運動、パターン、多様性をあげている。これらの造形要素と視覚言語を小学校修了までに表現と鑑賞の領域を通じて習得することを内容としている。表現のメディアとしては平面と立体に加えてデジタルメディアを含めている。

小学校図画工作科では造形遊びと絵や立体、工作で表すことが表現の内容である。このような表

現活動を促すためにイメージの形成の一つの方法として、造形要素の組合せや視覚言語としての奥行きや動きなどが有効な手段となっている。そしてそれは鑑賞の活動においても役立つと考えられる。



### 3. 中学校美術科での〔共通事項〕

次に、中学校美術科での〔共通事項〕は、第3学年まで同じで「ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。

イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。」と定めている。小学校図画工作科で修得した造形要素や視覚言語は、戦前の構成教育運動や戦後の狭義のデザイン教育の方法で捉えられた知性や方法論に偏った幾何学的、抽象的な表現として捉えるのではなく、表現のための要素や方法が人間の感情と結びついて、豊かな美術表現をするための方法として設定されていると理解できる。

形や色彩がもたらす感情というのは、例えば色の感情のように「暖かい感じ」「冷たい感じ」「柔らかい感じ」といった感覚的な内容や、高くそびえる塔に対して「崇高な感じ」というような直観的に把握するような内容も含まれている。美術の理解には知的理解の他に感覚的理解や直観的理解、さらには感性といった内容までも含んでいると解することができる。

中学校において美術作品を制作したり鑑賞したりすることで、豊かな感情を育み、情操教育としての役割を担うことができる。そこには形や色、材料のもつ様々な感情があり、絵画やデザインの構成や立体作品のもつ空間感、CGによる非現実のイメージなど多様な表現形式の特性が感覚や感情を豊かにすると考えられる。



#### 4. 視覚言語とイメージ

前述のように〔共通事項〕で示されている内容は、色や形の造形要素とその活用としての視覚言語によってイメージを豊かにする教育内容である。美術教育の方法として造形要素と視覚言語の考え方は19世紀後半の印象派以降に少しずつ整理され、20世紀になってバウハウスを初めとする実験的な教育機関において確立されてきた。

印象派以降の写真から離れて、画家は外界から受容したイメージや不安や希望などの抽象的で内的なイメージを色や形で表現するために、造形要素のもつ意味や感情を組合せながら表現をしてきた。それらは印象派以降のフォービズムやキュビズム、表現主義や抽象主義となって様々な絵画表現を色と形で展開してきた。

同時に、19世紀後半から工芸、デザインの発展が始まった。それは産業革命以後の急速な科学技術の発展にともなって、美術としての工芸、デザインの世界の確立であった。そして機械による日用品の生産も美しい製品をデザインすることを目指してきた。1920年代のバウハウスの教育によって、機能的で合理的な色や形が審美感に加わり、デザインの世界を拡大した。機械生産のために幾何学的な形が求められ、世界中の人々が使用するために色彩心理や形態心理が応用され、使いやすさや心地よさのために人間工学が発達してきた。

こうした20世紀の美術、デザイン、工芸の変遷と発展は美術教育に多大な影響を及ぼした。特にデザインと映像の発達には形と色とイメージの関係に新たな実験を繰り返し、常に斬新な美と新奇さを見るものに提供してきた。私達の身の周りの工業製品は色も形も今までに見ることがなかったような様々にデザインされたものが増え、映像では

現実には存在しない世界が見られるようになってきた。

形態心理学や色彩心理学はイメージの形成を豊かにする美術教育の方法に影響を与えてきた。例えばD.A.ドンデイスは「子供の最初の学習体験は触的意識を媒介とします。手の知識から外界との豊富な接触を通して、認識はさらに臭、聴、味を含むようになります。これらの感覚は急速に増大すると同時にやがて形象がこれを支配するようになります。すなわち視覚によって環境的情動の力学を見、認知し、理解する能力です。」とし、視覚の世界の優位と視覚リテラシーの重要性を述べている。



さらに造形要素と視覚言語の構造として、点、線、形、方向、明暗、色、テクスチャー、大きさ、奥行き、運動などをあげ、さらには対比と調和の関係で、不安定・均衡、非対称・対称、不規則性・規則性、複雑・簡単、分離・統合、錯綜・簡潔、強調・控えめ、気まぐれ・予測性、動的・静的、大胆・繊細、力点・中性、透明・不透明、変化・一定、歪み・正確、深み・平坦、並置・単独、でたらめ・系列性、鋭敏・散漫、偶発的・反復性などの特性をあげている。このように視覚言語の構造を理解し整理することで、視覚的表現の受容や理解が進むと考えられる。

視覚言語の構造を使って美術教育を進めることは、バウハウス以後、専門教育だけでなく、小・中学校においても明快な方法として受け入れられた。わが国の戦前の造形性を重視する形象図画教育や構成教育運動、構作教育などに見られ、戦後では造形教育センターの活動や昭和30年代からのデザイン教育の方法に見ることができる。

この教育については賛否両論がある。知的に先行しすぎるとか、幾何学的なものや抽象的なものになりやすいなどの批判もあり、逆に基礎的・基

本的な造形の特性を修得できるという利点もある。バウハウスが行った視覚言語の系統化はデザインの分野で発揮されたことから、デザインの基礎と捉えられているが、造形要素の活用は美術全般に機能する方法である。

また、視覚言語の構造を理解することで、日本の美術文化の理解に繋がることができる。バウハウスの実験が国際様式であったので、国や民族の美術文化と離れた存在のように受け止められがちだが、日本の美術文化には線を生かし、大胆な構図や意匠を駆使した琳派や浮世絵の伝統を有している。造形要素や視覚言語による美術教育は国際的な共通理解を基盤としながら、その国や民族の特性を盛り込むことがなされている。それがまさに形や色もたらす感情である。それらは文化的基盤の上に成り立っている。

#### 5. 日本のなもの

19世紀に日本文化が西洋に伝わり、日本人の自然主義と意匠化された表現が新鮮に受け入れられ、ジャポニズムとして注目された。近年、日本の伝統や文化の教育ということで再認識されている。生活に根ざした自然主義的美学が日本の伝統的美術・工芸の世界で表現されてきた。

そこには日本独自の造形要素や視覚言語が存在している。例えば、「にじみ」や「ぼかし」の表現は水や霧の自然環境に基づいている日本独特の造形要素であろう。また、非対称や不定形、余白の美や省略などは自然を模した日本庭園や日本画、



墨で描いた児童作品(小6)

工芸品の意匠などに見られ、それらは日本独自の表現である。さらに日本の模様は身近なモチーフを抽象化、簡略化した表現をしている。また、不定形や幾何学的図形、抽象的有機的表現は不可思議でもあり、同時に感情や内面を表現しているともいえる。これらの表現はわが国独自の造

形要素と視覚言語による表現であるといえる。

#### 6. おわりに：美術の力と〔共通事項〕

小・中学校における美術教育の目的は美術文化の理解と創造である。そのために表現や鑑賞の授業がなされている。そして図画工作科、美術科の学習の基礎には発想や構想とイメージの形成がある。〔共通事項〕はまさにそうした美術教育の基礎を培おうとするものである。わが国の美術文化を基盤とした造形要素や視覚言語によって、形や色から受ける感情を豊かに醸成させ、イメージの形成を促すものである。それは硬直化した方法論による学習ではなく、柔軟であったり直観的理解であったりする。

〔共通事項〕は、児童生徒が社会人となって美術文化を愛好し、理解し、さらには美術文化の創造にまで関わることを想定した学習内容である。まさに美術の力となるものである。

(ふくだ たかまさ)

#### 【参考文献】

- ・藤岡喜愛『イメージと人間』、NHK出版、1979
- ・Curriculum Planning and Development Division, Ministry of Education, Singapore ART AND CRAFTS SYLLABUS Primary, 2002
- ・D.A.ドンデイス、金子隆芳訳『形は語る 視覚言語の構造と分析』、サイエンス社、1979
- ・三井秀樹『美のジャポニズム』、文藝春秋、1998

#### 略歴

1952年生まれ。山口大学教育学部教授。山口大学大学院東アジア研究科研究科長。専門は美術教育、デザイン・構成。



## ここまで、そしてこれから

アートディレクター、エッセイスト 結城 昌子

### 一作家として

私は教育者ではありません。中学、高校の美術の教員免許をいちおう持っていますが、はるか昔のことで今どき役に立つとも思えません。

「では絵描きさんですか」と聞かれます。日々ビジュアル表現の直近にありますが、絵画を売って生計を立てている訳ではありません。

「じゃ、なにに様？」 おそらくアートの入門書をつくり続ける一風変わった作家というところが、ここでの私の肩書きであろうかと思えます。

そんな私に、美術教育の専門誌である「造形ジャーナル」から原稿依頼をいただきました。

「はて？ なにを書けばいいのだろう」

悩みながら既刊号をばらばら読ませていただいて、ちょっと驚いたことがありました。

最近では教育現場でも「私がやってきたのと同じようなことをやっている」という発見です。個人的に楽しみながら15年続けてきた「名画の敷居を下げる」活動。それが教室でも少しずつ活用されるようになっていく。そのことをうれしく思いながら、一方で時代の変化も感じました。

ご存じの方も多いと思いますが、小学館あーとぶっくシリーズ16巻(『ゴッホの絵本 うずまきぐるぐる』から『ミロの絵本 うっかり地球へ』までの個人編13巻と『ひらめき美術館』全3巻)を刊行するにあたっては、なかなか高いハードルの連続でした。絵を切りぬいたのが原因です。

「ベートーベンが正座して聞くものだって、親から教えられたのに。近頃はこういうゴッホの本が出る。うれしいね」と喜んでくださる方もあれば、「ゴッホの絵を切り抜くとはなににごとぞ」というご批判もありました。しかし、読者の皆さんからのほとんどの声は、「こういうのを待っていました。がんばって」というものでしたから、励みにこそなれ、立ち足る壁という感覚はありません。

んでした。

やはりたいへんだったのは、作品の所蔵機関と著作権継承者たる遺族(代理人)のチェックです。

クレーの遺族のように実に友好的な場合もありますが、ピカソやマティス、シャガールなどは本当に厳しく、くり返し本の趣旨を説明する手紙を書く以外ありませんでした。10年越しでようやく許可が下りたミロのような例もあります。もちろん作家の権利を守るのが著作権や人格権ですから、それは当然のことですけれど。

『画家の手もとに迫る 原寸美術館』の場合も企画段階ではなかなか理解されず、「原寸を表現してなにが面白いの？」と正面切って言われた時には、本当に落ち込んだものです。

こんなことを経て、すべての方が私の願いを聞いてくださり、現行のシリーズになった訳ですから、昨今軽々に名画を切りぬいている本などを見ますと、複雑な気持ちにならざるを得ません。物事はファーストエントリーがたいへんなのです。

冒頭から苦労自慢のような話になってしまいましたが、お許しください。自己紹介に代えさせていただきますと思います。

### 宝探し

私は、子どもと名画をつなぐ媒体としてずっと書籍というものを使ってきました。あるときは絵本のような展開にしたり、美術館のようなスタイルにしたり。単に「この絵はこういうもの」という解説をめざしているつもりはなく、小さな物語とともに息づき味わいながら、その世界に親しんでもらいたいという思いがありました。

そして、シリーズをはじめからちょうど二世代くらい巡ったと感じた最近、絵本というメディアでトライしてきたことをさらに進化(?)させ、子どもたちがワクワクできるような別の可能性はないだろうかと思いつめぐらすようになりました。

名画(国内外を問わず、古代から20世紀までに画家・彫刻家によって制作された造形遺産)を見るという、あまり注目されることがなくなったフィールドの楽しさを、あらたにどう伝えていったらいいのかという幕開きに立ち会っている感触が、今ささやかにあります。

子どものころ、先生の呼びかけに応え、近くの畑に縄文土器探しに行ったことがあります。潮干狩りさながらに畑を掘るわけです。幼い私にとって「大人はどうしてこんなことに興味を持つのかな」というのが初めの正直な感想だったように記憶しています。

ところが、3センチぐらいの土器なのか石なのか判別できないようなものを土の中に見つけ、友だちと一喜一憂するうちに、少しずつ縄文土器や大昔というものが頭のなかで動き始め、後々までひっきり続けたいという思い出になっていきます。この年齢になってもこの日のことを思い出すくらいですから、内心かなり衝撃的な体験になったことは間違いありません。

自分にこういうチャンスが与えられたという記憶は、「恵まれている」といううれしい思い出となって心の隅に残っていました。

私自身の古い記憶を披露してなにをお話したいかといいますと、未知なるものに出会うチャンスは子どもにとってもたいへん貴重なものだということです。釈迦に説法ですね。

『原寸美術館』をつくった時、誰よりも楽しんだのは実は私自身だったかもしれないと思っています。名画の名画たるありかを細部に探していくことを自分で繰り返してみても、全図では決して見ていなかったものを見つける経験をたくさんしました。「秘境探検」と形容してくださった高名な書評者もいらっしゃいましたが、基本は「宝探し」だと思っています。

子どもたちにとって、宝探しワクワクする行為だということは何れにも想像が付きまします。

動くことのない静止画である名画と、子どもたちとの出会いの新しいフィールドづくりにも、どうしてもこのワクワク感が重要です。

子どもは実に細部をよく見ます。「絵を見る」フィールドにうまく誘導された子どもたちの視線は、大人が見落とすようなささやかなものを見つけて、



ジブリ美術館のアートプログラムで使った、細部を見る力と宝探しのためのナビカード。こうした導入をつくることで、美術史の知識のなかで語られるべき歴史的名品も、子どもたちがアプローチしやすいものになる。

「あっ、こんなものが描かれている」「ここがおもしろい、ここが好きだ」「ここが嫌い」と騒ぎます。けっこう騒ぎます。

この春、東京三鷹のジブリ美術館で、ルーヴルの名画を見るアートプログラムを子どもたちと行いました。つきあい方の分からないものを前にし戸惑った子どもたちの表情が、少しずつ変化していくのに興味深く立ち会うことができました。

### デメリットがメリットに

画集は伝統あるすばらしいメディアですが、私はここ2〜3年、画集とともに絵を見る「空間」というものを通じて、子どもたちが名画に接するチャンスを広げることにはできないかと考えるようになり、試行錯誤を続けています。

そのひとつが「複製による名画の展覧会」。

時代は同じようなことを個別に考えた人々によって、前へ横へと転がり出ます。その例のように感じたのが、ジブリ美術館での展示でした。

なんとこの春まで一年間開催されていたジブリ美術館での「プチ・ルーヴル展」は、ルーヴル美術館所蔵の数十点の名品複製画と展示の工夫でした。私とスタッフがとある美術館と進めていた展示スタイルと通じるところがあって、正直驚きました。これは宮崎吾朗さんの原案と種田陽平さんのプランによるものです。よく工夫された展示で私自身楽しませていただきましたが、作品の選択そのものには再考すべき点も感じました。

さて、一般に複製というと、「オリジナル」に対しての「偽物」というイメージを抱きがちです。確かに唯一存在する「オリジナル」に対して「複製」はコピーに過ぎないということもできます。ですが、複製であるがゆえのメリットも実はたくさん存在します。



現在、日本の優れた印刷会社さんに蓄積されたノウハウと新しい技術を活用すると、目を見張る再現ができるようになっていきます。実際、「複製」と小さく脇に書き添えて、オリジナルを保護する目的や動かすことが不可能な作品の複製を展示する美術館や展覧会も少なくありません。

こんな話もあります。長い伝統を守り、ご本尊を秘仏として何百年も公開しないお寺があります。そうしたお寺では、ひとつの対応策として「御前立ち」という代わりの仏像を作って参拝者の前に出すということが行われています。京都のお寺でご住職の話に耳を傾けながら御前立ちの仏像を見せていただき、なるほどと思いました。

学校サイドでも美術館でもあるいはそれ以外の現場でも、こうしたことがもっと工夫されてもよいのではないのでしょうか。

その際、レプリカを並べた空間をそのまま「名画展」とし、そこに子どもたちをつれていき眺めることが鑑賞かというところではなく、そこには子どもにとっての導入のさまざまなフックが用意されていなければならないと思います。

宝探しに続いて、私はこんな語りかけをするようにしています。

「この絵の中からも一枚もらえたら、どの作品がいい？」

ただ漫然と宝ものを眺めていても、自分とどう関係があるのかよくわからない場合が多いものです。しかしここで、自分のものにすると考えると、がぜん見る目に気合いが入って自分の好みをはっきり見えてきます。「この絵が気になるなあ」と思った時に、なぜその絵が気になるかをひとつ考えてみる。すると意外にも「私は風景を描いた絵が好きなのだ」とか、「この色が好きだ」とか、「描かれている人の悲しそうな感じがいい」とか、いろんな発見が始まります。

こうしたやり方で子どもの感受性を目覚めさせると言えば大げさになりますが、ひとつの絵を好きになるということはとても大事なことです。次の絵を見る際その一枚の絵が基準になり、親しみやすく簡単に入り込めるようになると思います。

「友だちの友だちは友だちだ」風に絵を見ていく力が育っていくこと、それこそが鑑賞のツボだと思っています。

### 世界は広い。感じ方はいろいろ

今年、目前の新学習指導要領実施に向けて、鑑賞学習についての方法が頻繁に話題にのぼるようになると思います。表現と鑑賞。この二つのバランスの上に立つ図画工作、美術の授業とはどのようなものでしょうか。少し考えてみました。

絵を描くことが上手な子が、必ずしも絵を見る力があるわけではないですし、絵を見る力があつたとしても即、手が動くわけではありません。

しかし往々にして「見る目が育つと手も自然についてくる」ことを私は体験しています。

教室でいきなり「好きなように描きましょう」「思うまま」と言われても、大人だって好きなものがなんであるかを発見するまでに何十年もかかり、いまだに発見できずにいるなんていうことがあるように、子どもたちにもいきなり「好きなように」と言っても、できるわけではありません。

そこで例えば、なんでもない風景を前にして「風景を描きましょう」という時、まず「モネという画家はこんな風に空を描きました」、「ゴッホという画家はこんな空に描きました」、「マグリットはこんな空になりました」と違ったいくつかの複製画を見せるとします。絵を見て、子どもたち自身が「ああ、同じ空でもこんなに違っていいのだな」と気づいたその時から、何か子どもたちの中で変化し、たとえうまくまとめられなくても、押しつけられたものではない、いきいきとした自分の絵を描くようになると私は経験から感じています。

真似させようとするのではなく、たっぷりいろいろな作品を見せることによって、子どもたちの可能性がシンクロして飛躍することがあるという事実を信じていただきたいと思います。

何かを真剣に見つめるということはそういうことだろうと思います。

### しゃべるな、走るな、さわるな

鑑賞学習の可能性を広げるレプリカのメリットをもう少し考えてみたいと思います。

ヨーロッパなどでは、美術館の床にぺたっと座ってみんなで絵について語り合っている鑑賞風景をよく見かけます。私もそういう現場に参加させてもらったり、あるいは私自身がプログラムのフ



ァシリテーターとなったりしてさまざまなことを学びました。

日本が遅れているかと思ったら、決してそうは思いませんが、少し閉ざされているかもしれないと思います。絵画のありようの差からいって、仕方がないことかもしれません。

いいものを見たときになにか感じたとしても、「大きな声でしゃべってはいけない」、「走ってはいけない」「さわってはいけない」という子どもたちにとっての三重苦のなかで、すこやかなコミュニケーションがはかれるほど、日本の子どもたちもリードする私たち自身も成熟した鑑賞文化の中で育ってきてはいないと思います。かといって、美術館サイドに自由にさせてほしいといってもそれは困難なことでしょう。

「傷つけたら二度とつくりえない世界にひとつしかない作品」、「作品を守っている美術館に感謝しよう」と呼びかけている以上、リードする側が過度に神経質になることもあるかと思っています。

そこで複製画の登場です。レプリカですと、さわっても大丈夫。ある意味その前で少しくらい騒いでもオーケーです。もし万が一傷ついたら再びつくることも可能です。

この親しみやすさから、より深く自在に絵画空間に入り込むことができるのではないのでしょうか。私はオリジナルの持つオーラというものを見捨てるものではありませんが、できのよい画集によって私たちが作品に感動できるように、複製画ゆえに感動が絶たれるというようなことはないように

思います。デメリットをメリットに転換する発想が必要です。

### モニタで名画鑑賞？

では印刷複製を見るのではなく、進化しつつあるモニタ映像で鑑賞するということがあってもいいのではないのでしょうか。これなら、教室にいながらにして名画を見ることが出来ますから。

確かにそうに違いありません。なぜ印刷複製にこだわるのでしょうか。自分が絵を描いてきた人間でもあり、「絵の具に魅せられてきた人間だから」という他に決定的な理由がないような気がします。しかし、事はそれほど簡単なことではないのです。字数がある限りでお話します。

油絵とかフレスコ画とかは、絵の具を重ねることによって描き出された作品です。これらは人間の視覚にとって「減算混合によって描き出され、反射光によって目に飛び込んできている」という了解が私の心のどこかにあるのかもしれません。重ねれば重ねるほど濁っていく世界、あるいは塗った下から前にぬった色がにじみ出てくる世界。

微妙な減算混合によって醸し出されるニュアンスが絵の具による絵画世界には存在すると思っています。モニタの透過光による色彩の世界では、同じ青でもちょっとだけ暖かみのある青とか、冷たさのある青とかのニュアンスが残念ながらうまく再現できないように感じています。そして黒！

今、世界中が透過光モニタ上の動画で埋めつくされています。そんな時だからこそ逆に私は、仮想空間ではない自然反射光で見る絵画の名品を子どもたちには体験してもらいたいと思っています。モニタ映像での鑑賞授業は、まだ実験段階です。その前に体験してほしいことがあるわけですから。

といいながら、アートは時代とともに変化するのも事実。作品自体が仮想空間上でつくられているものも今では多く、モニタで鑑賞するのがふさわしいものもあります。そのことはもはや言うまでもありません。私自身テレビで「原寸美術館37V版」という番組をやっていますし、マルチメディアそのものを否定している訳ではないのです。

紙面が尽きました。この先の話はまた、別の機会にさせていただきたく思います。

(ゆうき まさこ)

# 子どもの椅子

FROM

北海道赤平市立豊里小学校  
桔梗 智恵美



## 子どもたちの思いを拾うこと

朝、学校に向かって車を運転して行くと、たいてい登校中の子どもたちと同じ時間帯に同じ場所で会います。学校への通勤には、車で20分ほど。吹雪の日や路面がつるつるの時はどきどきしますが、私はこの通勤の時

間に題材やテーマを思いつくことがあります。

大きな国道沿いを朝、通っていると、春先、日の出が遅くて、長い影ができる季節があります。バス停でバスを待つ子どもたちが、ぴょんぴょんはねているの

はこの季節です。何をしているのかなあ、と思って見ていると、大きな車が通ったときに、歩道にうつる車の影を飛び越えているのです。そのバス停に来る子どもたちは、何年かその季節だけ、同じようにして遊んでいました。大きいお姉さんが卒業すると、弟なのか、また入学してきた子どもが同じようにトラックの「影飛び」を引き継いでいました。

前任校では、運動会と春の遠足前の「全校てるてるぼうず展」というものがありました。晴天を願って、一階のホールに全校の子どもたちでてるてるぼうずを作ってきてもらって、飾るというものでした。遠足まで

が無事に終わって、てるてるぼうずをそれぞれが持ち帰ることになった日、なにかの用事で学校から出て運転をしていました。学校と住宅の間には田んぼがあって、そのあぜ道を通って帰って行く子どもが二人いました。

のどかなあ、と思って通りすぎ、用事が終わって学校に向かうと、その子どもが二人、私の車を見て手を振って何か叫んでいました。車を降りてみると、今日持ち帰ることになっていたてるてるぼうずが、田んぼの中に落ちていたのです。靴を脱いで、はだしになり、温かい田んぼの泥と水の中に入って、てるてるぼうずを拾いました。泥がついてしまったてるてるぼう

ずでも、なんとか拾って持ち帰ろうとした子どもの気持ちが嬉しくて、学校に戻って、こっそり玄関先の水道で足を洗ったのを覚えています。

3月になると、学校の行き帰りで、毎年、ネコヤナギを探します。卒業式の日の朝、家を早めに出て、道ばたに車を止め、長靴にはきかえ、小さいのこぎりや花ばさみを持って枝をもらってきます。それを学校の中に生けるのがわたしのここ数年の楽しみです。その辺にあるネコヤナギでも、「先生、これなに？」と聞いてきて、その感触を楽しむ子たちがいます。この次に、その子たちが道ばたのネコヤナギと出会ったときに、思

い出してくれるといいなあ、と思います。

学校の行き帰りに見つけた子どもに繋がる風景も、教室での何気ない生活のつづきもちいさな日々の宝物です。それが子どもたちが今しか味わえないであろう大事なものと焦点を当てることすら忙しい時代の流れの中で、難しいことなのかもしれません。でも、だからこそ、そんな子どもたちの状況の中で、子どもたちの思いを拾って、互いに共有できる図工の時間をつくっていきたいものです。

(ききょう ちえみ)

## 図工室

## 美術室

### 「生き物ランドへようこそ」 石川 由美(岩手県奥州市立岩谷堂小学校)

「先生、次はどうすればいいですか。」私の図工の授業でよく聞かれた声。失敗を恐れ、上手につくらなければ、という思いにとらわれ、つくる喜びを忘れていた子どもたちを、どうしたら解きほぐして自分の思いにこだわった表現へとつなげられるか。模索が始まった。

まずは、思うままにつくり、つくりかえることの楽しさを味

わわせたい。そこで、「生き物ランドへようこそ」という題材に取り組んだ。本校は、全国的に有名な岩谷堂筆筒の産地。近くの工房から廃材をいただき、それを自由に活用させた。

材料との出会い。さまざまな形の木片やかんなくずを好きなだけ触らせた(写真1)。首に巻く子や頭にさせる子もいた。友達に「これ羽みたい。」「たて

がみになるよ。」などと、感じたことを交流しながら想像をふくらませる。

創作意欲が高まったところで、道具との出会い。ちょうど祖父参観日があったので、学級通信で呼びかけ、のこぎりやかなづちの使い方を教わった。おぼつかない手で作業する子どもたちを温かく見守り、時には手本を見せてくださる中、和やかに



写真1



写真2



写真3

作業が進んでいった(写真2)。

この題材では、製作中にも積極的に鑑賞を取り入れてみた。

「立つようにしたいのにうまくいかないの。」「背中をななめに切った木で支えてみたら。」といった対話の中から、新たな発想が生まれ、自分の思いがさらに深まり、いつしか「次はどうすればいいの?」という声が減っていった。

「飛べるし、火もふくよ。」と自慢げに完成品(写真3)を見せてくれる子どもたちの表情に、喜びを見出すことができ、こちらも授業づくりへの活力とこれからのヒントをもらった。

(いしかわ ゆみ)

### 発想を膨らませて

荒木 由紀  
(茨城県稲敷市立新利根中学校)

「音からイメージするって初めて! 楽しい」という生徒の声が聞こえてくる。これは、音をもとにしてイメージを絵に表す学習をしたときの生徒の声である。

何かを作りたくても発想がわかず、苦い思いをしている生徒が多かった。それでは美術への関心も高まらない。そこで、関心の高い音楽を活用することによって美術の発想力を身に付けたいと考え、題材開発をした。

まず楽しく発想がわきやすく、その思考過程が生徒自身に定着しやすいものを考えた。そこで「音楽から発想したことを抽象絵画に表す」という学習過程を設定してみた。

生徒は、オーケストラの生演奏を目の前で見て多くの気付きをした。生の演奏を聴いたことで、実際に聴こえる音をイメージとしてとらえやすくすることができた。

ある生徒は、その音楽の様子から動物を想起し、その動物の図柄の中に多様なイメージを描きあげた。

音楽を聴いて描いたそれらの作品には、単に発想を形にしたものではない個々の思いの詰まったものが並んだ。

「先生、美術って楽しいね」そんな言葉を聞かされたとき、また授業の創造をする力がわいてくる今日この頃である。

(あらき ゆき)

# 自分と友だちの心の距離は見える？

## ～地域の芸術センターとの連携授業～

山口県美祢市立大田小学校 佐々木 真治

### 1. ゲスト・アーティストをお呼びして

本題材は、「秋吉台国際芸術村～アーティスト・イン・レジデンス」というプログラムのご協力をいただいて実現したものである。「守喜章<sup>もりよしあき</sup>」という二人組アーティストによるワークショップという形式で実施された。実際に来校されたのは、そのうちの一人の守章さん。題名は「おかげさま」である。「おかげさま？ きょうの図工の授業は何をするんだらう？」きょんとしつとも期待の気持ちをのぞかせる子どもたち。いつもと雰囲気の違いが授業が始まった。

### 2. 題材の概要

(1) 題材名・学年・時間

「おかげさま」・第6学年・2時間(90分)

(2) 準備物

ライト(光源)、円形シール(直径5mm、銀色)

(3) 活動の流れ

- ①くじ引きで二人組をつくる。
- ②ペアのうちの一人がライトの前で好きなポーズをつくる。
- ③壁に映った影の輪郭をなぞるようにパートナーがシールを貼る。※壁との距離は自由に決める。
- ④貼り終わったらパートナーと役割を交代する。
- ⑤二人とも貼り終わったら、二人で題名を考える。
- ⑥活動の気づきを発表し合う。

通常の造形活動では、人の形になったシールのラインが作品になる。しかしここでは、「二人の子ども同士の関わり方そのもの」も重要な内容であり、貼られたシールはその「アリバイ」のようなものになる。自分の影でありながら人にシールを貼ってもらって初めて輪郭のラインが表れる。だから、あなたのおかげ、「おかげさま」なのだそう。



「守さんともペアを組ませていただきました。」

(4) 活動の実際

活動の場所は、白い壁のある廊下や階段を選んだ。子どもたちが普段生活する環境に、影がひっそりと存在するように残したい、と考えたからである。色が銀色で直径が5mm程度の円形のシールという材料も、この繊細で生々しい存在感に深く関わっている。



また、ペアの決め方もとても重要である。「二人の関わり方が見えるようにする。」ということは仲良しペアばかりでは、相手に応じて関わり方を変えるおもしろさがなくなってしまふ。したがって、くじ引きでペアを決め、様々な関係が表れるようにした。

絶えず話し合って仲良く進めるペア、仲が悪いわけではないけれどなんとなくぎこちないペア、会話はほとんどないように見えても意外にスムーズに進めている男女のペア、様々である。互いに

シールを貼り終わったら、二人で題名を考えた。

「様々なポーズがあります。」

シールを貼ってもらった後、改めて自分の影を見つめると、自分の影でありながら新鮮に見えたようだ。各所から笑い声などが聞こえてきた。

また、夜、仕事を終えて帰宅する先生方が、暗がりには人の影が見えるようで一瞬ドキッとした、という笑い話まで生まれた。子どもの影の輪郭線が白い壁にうっすらと浮き上がると妙に生々しく見えるそうだ。

### 3. 活動から見たもの

「影の輪郭にシールを貼るのは、思ったより大変だったけど、後から見るとおもしろかったです。」「輪郭を見ただけで〇〇君というのがわかるので、リアルだと思いました。」「友だちの影に、ていねいにシールを貼りました。」「〇〇さんたちのペアは、よく協力してやっていました。形もリアルでした。」子どもたちの感想の一部である。

この感想からも「関わり方」を確認することはできるが、他に例をあげると、ポーズを決める際の様子も参考になる。直立不動のポーズとおどけたポーズを比べても、パートナーに対する意識が見て取れる。また、題名のつけ方にも表れる。「よしきとしょうた」や「ダブルゆうや」、「はるか&モーリーズ」など、そのまま名前を並べるのと工夫するのでは、二人の間の意識はそれぞれ違うはずだ。



これらを部分的に見て判断するのは誤解してしまう可能性があるが、互いに自分の影をパートナーの努力によって表し

てもらっている、「おかげさま」という言葉までは出なくても、全体的に「人にやってもらっている。」という気持ちはあったようだ。

### 4. アーティストと教師の視点を結ぶために

また、この題材に特有な出来事が振り返り活動の際に起こった。活動の気づきを各自が発表していたときのことだ。互いの思いがずれてしまって、スムーズに活動できないペアがあった。ところがこのペアが守さんにほめられたのである。二人のもどかしい気持ちが活動の姿によく表れていたのだ。さらに、二人は作品の題名を「RさんとKさん」とつけていた。この題名のつけ方にも、二人の距離感が見て取れる。



この視点は教師の私にとっても新鮮であった。通常、学校教育の現場では、人間関係がうまくいかない場合、解決策を考え支援する。しかし、ここではいきなりそこまでせずに、まずはその関係(距離感)そのものをアートの視点から浮き彫りにしようというのだ。もちろん二人は、互いにシールを貼る最低限のことは行っていたからこそ活動が成り立っていたわけで、それすらできなければ私も何か働きかけたであろう。

守さんと私(教師)で事前に内容の打ち合わせをしておいたので、共通理解の下に判断に迷わずに進めることができた。

やはり、教師は目の前の子どもたちに何が必要か考え、アーティストの意図もしっかりくみ取って授業をコーディネートしなければならない。

このような実践では、子どもはもちろん教師にとっても新しい視点を獲得する絶好のチャンスになるので、今後も積極的に取り組んでいきたいものである。

(ささき しんじ)



# 和風教材あらかると

## ～日本の文化と生活の美を見直す試み～

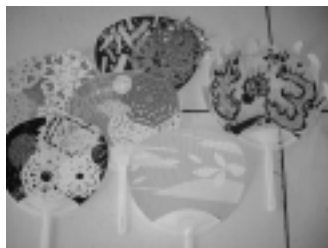
香川県高松市立牟礼中学校 四宮 和広

### はじめに

ここ数年「和風生活の美」を教材研究のテーマとして掲げ、「1年間に1題材」をノルマとして開発や先人の教材カバーにチャレンジしている。そして、鑑賞の授業でも時間短縮のために、造形につなぐ教材（「鳥獣人物戯画」をアニメーション・マンガや水墨画へ、「琳派」を箔貼り日本画へなど）を考えてきた。4時間内で完成できる「ショート教材」で、「早く・楽しく・使える」を目標に教材開発をする必要があった。また、地域の達人や特産物などを取り入れた生徒が身近に感じるものや、今の生活で役立ち、装飾性のある美しいものを扱い、学習意欲の持続や学習の深まりもねらってきた。新学習指導要領の改訂の重要な項目にもなっているので、美術の先生方に御指導を頂きたい思い提案するものでもある。

### 和の一 「涼を求める丸亀うちわ」 (1年生・3時間)

①丸亀市特産の「うちわ職人技」のVTRを視聴し、伝統の技術と新しい表現にふれさせ関心を持たせ、制作意欲をかき立てる。竹やプラスチックのうちわの支軸に和紙を貼る。



②涼しい色みや曲線・直線による感覚的な平面構成で、色紙のコラージュ構成の学習成果として制作させる。テーマは夏に向けて家庭で使えるものや体育祭の応援グッズの図柄にする。材料の工夫で写真や広告などユニークな発想も受け入れ、構成の学習を主に進めていく。

③この授業から部活動で総合体育大会の応援グッズを自主制作したり、感覚的な構成模様を他の

作品の演出に取り入れられたりする者が現れるという成果があった。

### 和の二 「和菓子のレプリカ」季節をかたちに (1年生・4時間)

①和菓子職人の巧みの技をVTRで学習し、洗練されたかたちを学習する。また、関心を持たせるために



「買って食する和菓子レポート」の課題も与える。

②共通テーマとして「秋」の風物を取り上げ、一つの季語から四つ以上のアイデアスケッチを出させる。ボリュームをつけたり単純化したり、デザイン化していく基礎を指導する。他の季節でも同様に考えさせ、アイデアを練らせる。(一人2個制作)

③おいしそうな色付けにするために紙粘土に絵の具を練りこませたり、演出に和紙や千代紙の装飾を提案したり、各自で制作の工夫をするよう計画を立てさせた。

④地域の和菓子屋さんに審査を依頼して賞や賞品、コメントも書いて頂き、意欲化を図った。審査発表の展示会も大盛況で教師も先輩もあたたかい気持ちで鑑賞していた。

### 和の三 「箸の模様のデザイン」プチ木彫 (2年生・4時間)

①はしの使い方のタブーをいくつか上げ、正しい持ち方や作法、自分サイズの規準を学習して興味を持た



せる。小刀や大きなカッターナイフによる彫り細工で制作することを告げる。伝統彫りのかたちの

やげん彫りや角彫りなどを学習し、レピテーションやグラデーションの構成要素を取り入れたシンプルな模様を考えさせる。

②発想トレーニングで10種類描かせ、そのうちのひとつを選び、美しい模様とその位置を考え、箸に下がきさせる。イニシャルなどの細かな文字や丸・曲線の多い困難なアイデアは省略や精選で直していく(小刀の安全徹底指導。ケガ人ゼロで楽しく制作)。

③油性マジックの着色や先に滑り止めの彫りを入れる工夫もみられた。ウレタン樹脂のニスで仕上げるため「塗料の用途」も学習に入れる。家族の反応をレポートさせ意見交換すると楽しさが倍増した。未だ箸をきちんと持つことができないことからの意見が多く、子育ての苦労や学校でのしつけの依頼もあった。

### 和の四 「祝いの箸袋」折り紙にコラージュしよう (2年生・4時間)

①おせち料理の祝膳に、手作りの箸袋で楽しい正月を迎えるための提案。大きめの折り紙で「箸袋折り」



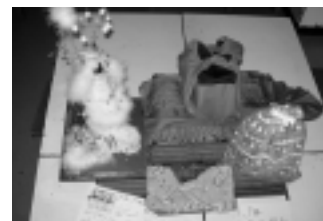
にチャレンジさせ、オリジナルの袋の形を考えさせる。年賀状のサンプル広告や家族へのメッセージカードをコラージュし、千代紙、水引、水墨画などをアレンジして和風の席を楽しく演出させる(ほかクリスマスパーティー、誕生会バージョンにする生徒もいた)。

②まず自分の箸袋を制作し、家族人数分制作させるが、家族それぞれへの思いを込めて特徴を表現させるとよい。お年玉のおねだりでポチ袋付きのものや運勢占い付きの作品、楊枝やプラスチックのナイフをそれぞれに付けるなど気配りが施されていた。

③冬休みの宿題に使ってみての家族の意見や感想をレポートさせる。うれしい意見をできるだけ多く読みあげ、家族のあり方や保護者の思いも代弁するとよい。

### 和の五 「ふるしき・ラッピング」 (3年生・1時間)

①事前に10種類の包み方のプリントを配布して家庭で練習させておく。ふるしきのサイズや、伝統的な柄、布の種類など、最近見直されているふるしきの文化を学習する。



②6班に分かれて6種類(バレーボール、ティッシュ箱、ワインのビンなど)の包み方を助け合いながら全種類をマスター練習させる。早く出来た者からオリジナルの装飾的な包み方を考案させる。苦手とする友達にアドバイスしたり、オリジナルの完成を大喜びで報告したりと主体的に取り組んでいた。

③美術科のアピール効果もねらって、先生方にも参加を呼びかけ現職教育の一貫とした。特別支援の生徒や特に苦手とする生徒を支援して、6種類を30分程度でクリアできた。

④正月用の祝酒の装飾包みやクリスマスのシャンパン包みを紹介し、贈る人への思いをラッピングするうれしさと使い方の可能性を提案し、学習のまとめとする。

### おわりに

「用と美」のねらいを持って制作させると家庭からの反応がすこぶるよかった。家庭で材料を準備する主体的な取り組み方にわが子を見直したという保護者の意見や、和菓子職人からは表現材料のユニークな発想や健康を考えた題名の工夫など勉強になるので毎年審査をさせて欲しいといううれしい意見があった。また、評価の観点で見落としている生徒の深い思いや多角的な発想を理解できていない自分に気付かされた。なにより授業で活発に意見交換できるようになったことは大きな成果であった。今後の課題として基礎・基本とするポイントがまだ十分に練れていないので、制作過程ごとの目標設定の検討をしなければならない。

また、発想トレーニングのワークシートの作成や参考作品等の提示資料の精選など、課題は山積みである。(しのみや かずひろ)



# 子どもたちの夢と願いをのせて

～第46回を迎える造形おかざきっ子展～

愛知県岡崎市教育委員会 杉原 恵美子

## 1. はじめに

—お母さん、ごめんね。これからもよろしく—  
これは、昨年度のおかざきっ子展のテーマ「感じて つたえて すてきな出会い」を受けて、中3の生徒が樹脂粘土で作ったお弁当「MADE IN MY HEART」に添えたメッセージである。そこには悪化した母子関係を修復するきっかけにしたいという子どもの思いが見え隠れする。  
このように、子どもたち一人ひとりの思いを言葉で作品に添えることで、より強く作者の思いが伝わり、会場で多くの素敵な出会いがあるように願って第45回展は開催された。

## 2. 造形おかざきっ子の歴史

昭和39年11月22、23日の両日、第1回展が菟田公園で開かれた。  
「子どもたちのつくりだす造形作品は、子どもたちの夢や願いであり、生命そのもの。1時間1時間の図工・美術の授業で生まれた作品を学級や校内の展示だけで終わらせたくない。野外展示が可能なものを一か所に集めて展示し、子どもたちに自信をもたせ創造の芽を伸ばしたい」。こうした教師の願いが野外展を生み出した。  
その後、菟田公園(第1～第9回展)、東公園(第10～14回展)、菅生川河川敷(第15～21回展)、おかざき世界子ども美術博物館(第22回展～現在)と会場を移し、回を重ねるごとに内容も充実していった。それに合わせて参観者も増加し、岡崎の秋の大きな行事として市民に親しまれている。

## 3. 5つの理念

私たちは子どもたちを指導するにあたり、5つの理念を大切にしている。

- ①授業から生まれた作品を展示する
- ②毎年一人1点を展示する(共同作品も可)
- ③野外展にふさわしい作品を展示する
- ④子どもたちにとっては作品鑑賞の機会、教師にとっては造形教育に対する意識高揚・教材研究

の機会とする

⑤岡崎の造形教育の一端を、県内外にアピールする機会とする  
年度初め、この理念を図工・美術主任会で確認し、新しいテーマのもと、おかざきっ子展が開催されている。



## 4. 第46回展に向けて

例年のように、主任を中心に各校の先生方・PTAの方々に力を借りて、搬入・搬出が行われる。10月24、25日には、市立幼小中76校の子どもたち全員の作品が展示され、工夫を凝らしたオープニングセレモニーで幕を開ける。2日間の会期には市内の図工・美術主任の先生が運営する3つの造形コーナーも開かれ、大人気である。  
今年度のテーマとなる「みんなのカタチ大集合」のもと、各校が形から発想した題材を研究し、子どもたちはイメージを膨らませて作品作りに取り組むであろう。どんな形が集合して会場をにぎわすのか、わくわくするところである。この紙面をお読みになり、ご都合のつく方はぜひお出かけいただくとありがたい。

## 5. おわりに

今後も、保護者、岡崎市教育委員会、岡崎葵ライオンズクラブなど大勢の方々に支えられ、おかざきっ子展が開催されるであろう。感謝すると同時に、一人一人の子どもたちの夢と願いが、つくる、見せるエネルギーを醸し出し、会場に訪れた人たちの思いと融合していくような野外展を目指したい。そして先輩から受け継いだ気概、情熱を若い先生たちに伝えながら、これからもこのおかざきっ子展が発展していくことを願ってやまない。  
(すぎはら えみこ)

## 造形ピックアップ

# 日本美術教育会で「？」が「！」に

東京都大田区立梅田小学校 図画工作専科 高橋 晶子

日本美術教育会は月1回例会と、夏には毎年「参加してよかった！」と思える研究大会を開催しています。コンセプトは【子どもの実践をもとに交流する】、【具体的な作品や子どもの姿から話をする】です。経験、担任と専科、年齢問わず自由に意見を言い合い、明日の授業の活力をもらえる研究会です。

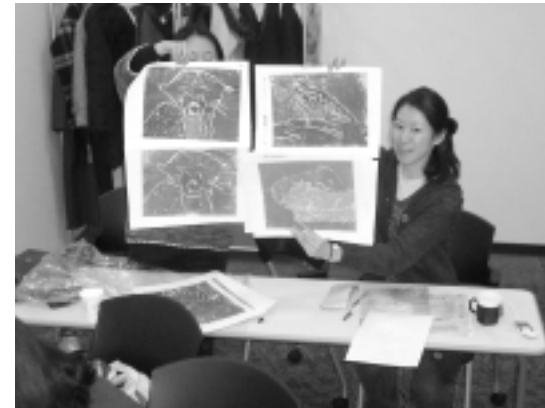
毎月の例会は、東京・近県の会員の実践発表や指導作品の持ち寄り研究などで交流します。また、各校の展覧会会場で研修を行うこともあります。

夏の大会はテーマについての実践発表のほか、一昨年は直島の〈地中美術館〉、昨年は〈21\_21DESIGN SIGHT〉美術館など、みんなで行くことでより楽しくより深まる鑑賞研修を行いました。

日本美術教育会の始まりは1970年。創造美育協会、造形教育センター、新しい絵の会など当時の民間美術教育団体の会員の交流を目的に設立されました。39年目の現在は実践者が集い、授業が楽しくなる研究会を参加者で作っています。活動を知りたい方、参加してみたいと思った方はぜひ下記アドレスにもアクセスください。

<http://earthmember.hp.infoseek.co.jp/Association.htm>

(たかはし あきこ)



月例会 2009年1月



夏の研究大会 2008年8月

## 造形プラザ

# 図工室・美術室オンライン

明日の授業に使える！ 子どもの心に響く！ 「目からウロコ」の知恵袋。

## WEBマガジン「図工室・美術室オンライン」サイトのご案内

### 【図工室・美術室オンラインとは】

「図工室・美術室オンライン」とは、明日の授業で使え、子どもの心に響くような、「なるほど！ そうなのか！」「これは是非みんなに教えてあげたい！」と思えるような図画工作・美術教育に関する情報を発信、交流するWEBマガジンです。

### 【アクセス】

開隆堂のホームページ<http://www.kairyudo.co.jp>からアクセスしていただけます。「図工室・美術室オンライン」で検索していただくこともできます。

### 【応募要項】

詳しくはWEBページをご覧ください。採用の場合には図書カードを差し上げます。

### 【貴重な情報をお寄せ下さい！】

このWEBマガジンは、先生方からお寄せいただいた情報によって成り立つ「参加型」のコーナーです。ご覧になっている先生方も「こんなおもしろい情報があるよ」など、図工・美術教育の発展のために、みんなで共有したい貴重な情報を必ず持っていらっしゃるはず。そんな貴重な情報は是非メールにてお送り下さい！